

しろそうだ、満たされそうだ、魅力的だという興味で行動する場合もあるだろう。意志のサブシステムをさらに展開すると、次のようになる。

①個人的原因帰属(personal causation): 作業に対する能力と結果への自信

②価値(value): 作業の選択、過程、結果に対する価値観

③興味(interest): 楽しみ、満足、魅力

2) 習慣の影響: 日常の生活行動の多くは常識的パターンができあがり、ほとんど意識にのぼることなく行われている。たとえば、朝起きて、食事をし、その日のルーティンとなっている行動をこなすのは一般的な習慣である。そこでは、学生、主婦、仕事をする人といった無意識に身に付いた役割行動がとられている。これらは過去において繰り返し、且つ慣れ親しみながら学習した行動パターンであり、役割行動である。

習慣のサブシステムをさらに展開すると、次のようになる。

①習慣(habits): 慣れ親しみ、暗黙の了解のもとに行われるような、内面化された行動パターン

②役割(roles): 習慣化した役割。社会的同一性と自己同一性とが一致している、内面化された役割

3) 精神的、知的、身体的機能の影響: 筋骨格系、神経系、循環器系、認知系の相互作用にて、作業遂行が実行される。これを、遂行のサブシステム(performance subsystem)という。現在の医学モデルでは、焦点がこのサブシステムに集中している。遂行の技能は、コミュニケーションと交流技能、処理技能、知覚運動技能よりなる。

4) 環境の影響: 「運がいい」とか、「チャンスに恵まれる」とかいった、作業行動の機会を提供する環境や、反対に制限される環境がある。これらは、物理的のみならず、歴史的、社会文化的影響も含む。

以上のような、3つのサブシステムと環境の影響によって作業行動は実行される。身体障害者の作業行動障害は、医学の立場からは、上述3)のサブシステムの一部の機能障害によって引き起こされるととらえられている。一方、作業療法の立場からは、身体障害だけではなく、上述全ての影響が統合した結果として作

業行動障害をとらえる。

たとえば、身体障害があっても、意志がしっかりしていれば、ボランティアの依頼や日常生活の計画を適宜変更することで行動適応でき、作業行動障害とはならない。次に、この4つの枠組みから、症例をまとめる。

6. 症例 1

1) 現在、重要と考えている生活は次の通り。

プログラマーとしての仕事

介助犬に関する講演活動

介助犬に関するインターネット上での交信

車椅子バスケットボール

読書

犬との関係：プログラマーとしての仕事では、フロッピーを拾い上げる、電話を持って来るなど。車椅子バスケットボールでは、犬がマスコットとなりチームの結束を強めている。読書でも、落ちた本を拾う。昼間車椅子から転倒した場合、電話を持ってきてもらい緊急連絡できる。生活構成は妻と介助犬で、昼間は妻は仕事で留守。本人はプログラマーとして在宅勤務ということで、緊急連絡（安全の確保）の重要性について、妻にとっても価値が高い。

2) 重要と考えている作業遂行上の問題点を順にあげ、それぞれを主観的に数字に表すと(COPMによる)；-

	重要度	遂行度	満足度
1. トイレ	10	6	6
2. 入浴	9	1	7
3. 更衣	9	4	5
4. 買い物	5	3	8
5. 食事	10	8	8
		平均 4.4	平均 5.8

まとめ：自分で出来ることは半分以下だと感じているが、満足度は遂行度より高く、努力の結果についてある程度満足し、感謝している。この項目での犬との関

与は、更衣（袖を引っ張る）、買い物（品物をとる。財布の受け渡し）である。

3) 身体的動作への介助犬の影響（動作上のメリット）

以下の数字は、AMPSでの評点で、

4=(competent performance)

努力を要さず、能率良く、安全に出来る、有能な遂行

3=(questionable performance)

効率に疑問を感じる程度の遂行

2=(ineffective performance)

時間がかかり、他のことで中断されたりする非効率的な遂行

例：努力を要する、効率が悪い、安全性に欠ける

1=(deficit performance)

他人の介助や援助が必要

課題が混乱状態になったり、限界を超えて時間がかかったり、物を破損したり、危険が予想される遂行

* 姿勢

安定性・・・運動時の体幹の安定性は、介助犬の補助によって無理な、あるいは危険な姿勢をしないで済む（例：上着を脱ぐとき袖を引っ張ってくれる）。2 → 3

アライメント・・・犬の介助により、無理な前屈、側屈をしないで済む。

2 → 3

上肢帯の運動・・・運動量を減らせるが、2

* 可動性

歩行・・・車椅子。2

リーチ・・・限られた範囲を除いて出来ないことが可能となる。

1 → 3

体幹の屈曲・・・無理な前屈は避けられる。1 → 3

* 協調性

両手の協調性・・・2

操作性・・・2 ~ 1

円滑性・・・犬の介入により、スムーズに遂行できる。2 → 3

*力と努力

移動・・・車椅子による。 2

運搬・・・1～2

持ち上げ・・・1→2

力の調整・・・1～2

把持・・・1～2

*エネルギー

耐久性・・・1～2→4

ペース・・・2→3

4) AMPSで観察した作業工程から、本人が介助犬をコントロールすることで配分している。AMPSによる作業工程の観察項目は、精神的なエネルギー、知識（選択、使用法、取り扱い、留意、質問）、時間の組織化（開始、継続、順序、終結）、空間と対象の組織化（探索と配置、収集、整理、片づけ、進路設定）、適応（気づきと反応、順応、調整、利益）からなる。以上は全て、4で、遂行過程について問題はない。

5) 作業行動について4つの枠組みからのまとめ：

意志；介助犬による緊急連絡（安全の確保）の重要性について、妻と一致する高い価値観をもつ。

習慣；介助犬の存在は、犬の主人としての役割感を与えている。

精神的、知的、身体的機能の影響；身体障害は重度であるが、介助犬によってメリットを得ている（上述3参照）。

環境：介助犬、車いす対応一戸建て住宅、在宅勤務

7. 症例2

生活構成は、妻は長期入院中で（脊髄損傷）介護者（精神病歴を持つ若い男性とボランティア）、介助犬により24時間介護を受ける。障害者移送サービスと有償家事サービスを主体とするケアサービス組織の管理運営をしている。

1) 現在、重要と考えている生活は次の通り。

ケアサービス組織の運営

筋ジストロフィーの集まり

講演会を聞きに行く

まとめ：以上の内容の作業遂行にあたり、介助犬が直接関与する部分はない。講演会については、その内のかなりの部分で、介助犬に関するものが含まれる。

2) 現在重要と考えている生活の問題と遂行度、満足度(COPMによる)

	重要度	遂行度	満足度
1. 妻と犬のケア	10	5	5
2. 食事	10	8	8
3. 健康管理	10	8	8
4. つきあい	8	7	8
5. ケアサービス組織	8	8	5
		平均 7.2	平均 6.8

まとめ：遂行度、満足度共に高い。

以上の内容の作業遂行にあたり、介助犬が直接関与する部分はない。

3) 身体的動作への介助犬の影響 (AMPSによる)

*姿勢

安定性、アライメント、ポジション・・・1。介護人による介助が必要

*可動性

歩行・・・2。電動車いすによる

リーチ・・・1 → 2 ~ 3。介助犬により限られた範囲を除いて出来ないことが可能となる。効率は悪いことがある。

体幹の屈曲・・・1。介護人による介助が必要

*協調性

両手の協調性・・・2

操作性・・・2

円滑性・・・2

*力と努力

移動・・・2。電動車椅子による

運搬・・・1 → 2 ~ 3。介助犬により限られた範囲を除いて出来ないことが可能となる

持ち上げ・・・1～2→2～3。介助犬により限られた範囲を除いて出来ないことが可能となる。

力の調整・・・3

把持・・・2

*エネルギー

耐久性・・・4

ペース・・・4

4) AMPSで観察した作業過程から、介護人に依頼する場合でも、介助犬が知らせてくれる（体位交換）などK氏が介助犬をコントロールすることで問題を解決している。AMPSによる作業過程の観察項目は、精神的なエネルギー、知識（選択、使用法、取り扱い、留意、質問）、時間の組織化（開始、継続、順序、終結）、空間と対象の組織化（探索と配置、収集、整理、片づけ、進路設定）、適応（気づきと反応、順応、調整、利益）からなる。以上は全て、4。

5) 作業行動について4つの枠組みからのまとめ：

意志；「障害が進行するにつれ、自暴自棄で無為（外に出たくない、人に会いたくない）の生活になっていた。自分でも変わりたいと思っていた。自分に絶対という条件をつけるために介助犬を申請した。犬が来て規則正しい生活ができる。介助犬は対象である。もし、介助犬がいなければ声を出すこともない。散歩をしたり、タオルをとらせて遊ぶこともない。介助犬は、電話、インターネットでの話題である。困っているときに助けてくれるという安心感がある。他人に頼むという遠慮がなく、自分で選択できる。人に『済みません』というのはいやだ。自分は何かできるはずだ。」といった発言から、介助犬の存在は、本人に自信と尊厳を自覚させていることが分かる。これらは、妻の存在とかさなっている。意志のなかでも特に個人的原因帰属観を高めていると思われる。

習慣；生育歴において、小動物の飼育経験がかなりあり、犬に慣れているといえる。本人の内的な役割として、介助犬の存在は、犬の主人としての役割感を与えている。

精神的、知的、身体的機能の影響；身体障害は重度である。介助犬からの直接のメリットは身体的機能よりも、精神的、知的機能への影響がおおきい。

環境；介助犬、車いす対応一戸建て住宅。有償ボランティアグループのリーダー

として、地域交流の核となっている。たえず、仲間にかこまれている。
 デメリットとして、交通機関、レストランで介助犬を断られることがある。

8. 症例 3

1) 現在、重要と考えている生活については、体調管理など今後の不安が大きい
 ため具体性に欠ける。

2) 現在重要と考えている生活の問題と遂行度、満足度(COPMによる)

重要度	遂行度	満足度
1. 体調管理	7	10
2. これからどうするか	1	1
3. 仕事の適性	3	3
4. 会話をしたい。孤独感		
5. 外出		
	平均 3.7	平均 4.7

まとめ：面接で、自分の意志をはっきりと決めることが難しい。例えば、「会話をしたい。孤独である。外出したい」という問題点について、数字で表すことを求められても、「前よりは（介助犬が来て、遂行度が）上がっている。（満足度）よくない。」といった言葉で表している。「体調の管理」のように、家族の介護に頼る部分では、遂行度に比して、感謝の気持ちが強く、満足度は高い。

3) 身体的動作への介助犬の影響 (AMPSによる)

* 姿勢

安定性、アライメント、ポジション・・・1。介助が必要

* 可動性

歩行・・・2。電動車いすによる

リーチ・・・1 → 2～3 介助犬により限られた範囲を除いて出来ないことが
 可能となる。効率が悪くことがある。

体幹の屈曲・・・1。介助が必要

* 協調性

両手の協調性・・・1～2

操作性・・・1～2

円滑性・・・2

*力と努力

移動・・・2。電動車椅子による

運搬・・・1→2～3。介助犬により限られた範囲を除いて出来ないことが可能となる

持ち上げ・・・1～2→2～3。介助犬により限られた範囲を除いて出来ないことが可能となる。

力の調整・・・2

把持・・・2

*エネルギー

耐久性・・・2～3

ペース・・・2～3

まとめ：動作のうえで、具体的な介助犬のメリットが数字になって表せられるところは、リーチ、運搬、持ち上げである。本人は、車いすの脇に落ちた手を、ラップボード上に乗せてもらうのを、大きなメリットとしてあげているが、作業動作能力の向上としては、数字に還元できない。

4) AMPSによる作業過程の観察項目

*精神的なエネルギー・・・4

*知識

選択・・・4

使用法...4

取り扱い...4

留意...4

質問...4

*時間の組織化

開始...4

継続...3～4

順序...3～4

終結...3～4

* 空間と対象の組織化

探索と配置...4

収集...4

整理...4

片づけ...3~4

進路設定...4

* 適応

気づきと反応...4

順応...4

調整...4

利益...4

まとめ；机の高さ、形、物の配置などを工夫している。例えば、介助犬がくわえやすいように、手首や、テレビ、電話、ドアのノブなどにループをつけたりして問題解決のための調整をしている。援助の必要なときに、介助犬および家族への適当な依頼ができる。それらが、効果的に行われている。

5) 作業行動について4つの枠組みからのまとめ：

意志；「寂しいので介助犬が欲しいと思った。精神的な安定が得られる。楽しい。訓練で声を出すのはしんどいが、介助犬の主人になったことで、発声が大きくなるようになり、何をしたら良く、何が悪いかわかると決断して命令できるようになった。作業所から疲れて帰ってきてても、犬を見ると外に連れていこうと思うようになった。遊んでやりたいなと思う。」というように、介助犬に対する興味の部分が大きい。介助犬のこれからの躰のことで「躰には辛抱がいる。世話のことで不安があり、トレーナーが近くにいてほしい」という状態にある。もし、躰をうまくできるようになると、自分の能力への自信（個人的原因帰属）、自分の存在が大事だ（価値）という観念につながる可能性があり、今後の課題になっている。

習慣；生育歴において、犬の飼育経験があり、慣れている。本人の内的な役割として、介助犬の存在は、犬のトレーナー、および主人としての役割感を与えている。

精神的、知的、身体的機能の影響；身体障害は重度である。介助犬からの直接のメリットは身体的機能よりも、精神的、知的機能への影響がおおきい。

環境：介助犬、車いす対応一戸建て住宅。過疎地域の土地柄孤立しがちであるが、介助犬を話題に、Eメールや電話での交流、町に出たときに声をかけられること、学校での講演の機会が多くなっている。

ディメリットとして、作業所で介助犬を断られている。交通機関、レストランでも介助犬を断られることがある。

9. 介助犬のレシピエントになるための要件

以上のすでに介助犬から多くの利益を得ている3症例から、レシピエントとして成り立つ要件を、作業行動論としてまとめてみる。

1) 意志のサブシステムと介助犬の関係：「個人的原因帰属」「価値」「興味」に介助犬の存在が関わっている必要があるだろう。

ちなみに症例1では、特に介助犬がいざという時に緊急連絡をしてくれることに高い価値をおいている。症例2の場合、重度障害にかかわらず、作業遂行度も満足度も高く、つまり「個人的原因帰属」が高いその原因として介助犬が深く関わっている。介助犬は「対象」と表現するもう一人の自分であり、その能力は自らの物として統合されている。症例3では、介助犬は、特に「興味」に関わる存在であり、安心、安寧感を引き出している。

2) 習慣のサブシステムと介助犬の関係：犬に慣れているという要件と、犬の主人としての内的役割感を持っている必要がある。

ちなみに3症例ともに、犬の主人としての役割感があり、躾、食事の世話、散歩、健康管理に自ら気を配っている。これらは過去の習慣と大きな差は無く、つまり動物を飼った経験があり、介助犬にたいする精神的受け入れに抵抗を感じていない。

3) 精神的、知的、身体的機能の遂行サブシステムと介助犬の関係：症例ではレシピエントの身体的機能の遂行レベルが、ほとんど不可能な状態であって、直接そのできない動作を介助犬が助けることが出来なくても、介助犬を介してさまざまな問題解決の手がかりを得ている。つまり、レシピエントには環境をコントロール出来る精神的、知的機能が要求される。

また症例では、介助犬がするリーチ、運搬、持ち上げ、力の調整、把持などの直接的な動作介助のメリットだけでなく、間接的にエネルギーの面で、耐久性の

増加、ペース配分の円滑性にメリットを与えている。直接的な動作の介助のみに目を向けるのではなく、問題解決のための手がかりや、間接的なメリットにも目を向けられ、物の配置を工夫したり、方法の調整をする意欲が求められる。

4) 環境と介助犬の関係

症例では、社会文化的に参加を拒まれるなどの問題をかかえているが、一戸建てに住み、家庭内では介助犬を飼育できる環境にある。

介助犬のいる環境は、尻尾を振って「何かやらせて」と云っているような、レシピエントに作業を促す刺激の面と、一方で世話、健康管理、躰、近所への配慮で一戸建てなどでは良いがアパートでは難しいといった制限をかかえる。

レシピエントに向けた環境、つまり犬を飼える環境が整えられており、健康管理のために獣医師に相談でき、躰のためにトレーナーが近くに居ることが望ましい。

社会文化的に参加を拒まれる問題は、障害者の作業遂行の意志を挫くものであり、人権の問題として法律や条令によってこれを解決しなければならない。

10. 作業療法における今後の課題

身体障害者が介助犬とともに、作業遂行障害を解決していけるためには、次のような段階づけられた過程を作業療法として用意し、援助する必要があると思われる。

- 例：1. 介助犬に命令できる←自分の意志をはっきりと言える←「個人的原因帰属」「価値」「興味」観をもつ←作業療法の過程で、作業目的や手段を選択できる←主体的な作業選択の機会
2. 介助犬に慣れる←介助犬とのシユミレーションで、相性を体験する←作業療法の一環として、ふれあいの機会を提供するために作業療法室での介助犬の飼育と利用
3. 介助犬の世話を体験し、主人としての役割感を持つ←体験の機会の提供

その他、参加の制限等、社会文化的問題の解決など山積するが、潜在的なニーズが表に表れない現状では、とりあえず以上のような、レシピエントとしての要件として最も基本的な部分を援助する必要があると考える。

11. まとめ

身体障害者に対する介助犬の作業療法的有用性と課題について、作業遂行過程での意志のサブシステム、習慣のサブシステム、精神的、知的、身体的機能の遂行サブシステム、および環境の各枠組みと介助犬との関係から、症例研究によって考察した。

レシピエントとなり得るためには、介助犬に対してしっかりした意志、良い習慣と役割感があり、身体障害を精神的、知的レベルで補え、環境が整っていることが必要であった。この要件は、最初からできあがっているというよりも、レシピエントと介助犬の協働により、正のフィードバックを互いに引き出している結果によるものである。作業療法では、身体障害者が介助犬によるメリットを受けられるよう、レシピエントとしての要件を整えるべく、援助を提供して行かなければならない。

参考文献

- 1) Kielhofner, G.: A Model of Human Occupation -Theory and Application-
Second Edition. Williams & Wilkins, 1995.
- 1) 土屋、今田、大川 編：日常生活活動（動作）－評価と訓練の実際－第3版。
医歯薬出版，1992.
- 2) '95リウマチ白書、リウマチ患者の実態。社団法人日本リウマチ友の会，1995.

介助犬を利用していない人の介助犬に対する意識調査

— 期待・不安に関して —

名古屋大学大学院多元数理科学研究科

宮尾 克 (研究班員)

大林 博美 (研究協力員)

[要約]

欧米では、介助犬育成の取り組みが始まり約20年が過ぎたところであり、その数もアメリカでは1000頭以上が活躍し「介助犬の存在」は、障害者の自立生活の新しい手段のひとつになり有用性のあることが実例をもって示されている。

日本では、まだ実働数が、10頭に満たない状況であり数年前から民間団体による取り組みが始まり5年ほど前からマスメディアで取り上げられ、少しずつ介助犬の名前は知られるようになったばかりである。

そこで今回、介助犬をまだ利用していない障害者の方々を対象として介助犬に対する期待や不安について実態調査を行ない、有用性のある介助犬への利用を考慮していくうえで何がバリアーになるかを知るために調査を行なったので報告する。

調査目的は、①介助犬に対する知識を知り、障害者個々の介助犬への期待を知る、②もし介助犬を利用する場合どのような不安や問題点があるかを知ること、の2点である。

調査方法は、介助犬の知識の有無にかかわらず介助犬のビデオを事前にみてもらい、介助犬の役割のイメージを具体的に示した。その後、研究班員が聞き取り調査を行なった。

調査の結果では、今回の調査対象者7名（女性6名、男性1名）は、上肢及び下肢になんらかの障害をもち、日常生活動作と生活関連動作などに何らかの介助を必要として在宅で生活している者である。

介助犬に対する主な期待は、①緊急事態に対処する支援への期待、②日常生活動作などへの介助の期待、③精神的支援への期待の3つの期待であった。

また、介助犬を利用することの障害者本人の不安は、①家族や介護者の理解や協力に対してと、②介助犬飼育負担(管理や経済的負担)であることがわかった。

介護を要する対象者の多くは、身体障害や疾病に加えて精神的、情緒的問題や家庭的、地域的な援助問題を抱えている場合が多く経済的、就労的問題も抱えるなど多面的な社会問題、生活問題を抱えていることが多い。

したがって、このような障害者の生活状況を相対的に理解し有用性のある方法で生活の質を向上させていくための条件整備が望まれるところである。

1.はじめに

欧米では、介助犬育成の取り組みが始まり約20年が過ぎたところであり、その数もアメリカでは1000頭以上が活躍し「介助犬の存在」は、障害者の自立生活の新しい手段のひとつになることが実例をもって示されている。¹⁾

また、1996年にアメリカのアレン&フラスコビッチ等の研究によれば²⁾、障害者が介助犬をもつことで本来介助にかかる労働時間を一人あたり78%も削減し、同時に介助にかかる費用が一人当たり年間130万円削減され、「介助犬の存在」が障害者や介助者にとっても日常生活を支援する有用な手段となり得ることが証明されている。また脊椎損傷等の障害者の登校率や入社率が向上し社会性の向上がみられるなどQOLの向上に役立っていることなども示されている。

このように経済的有用性やQOLの向上に効果をもたらす介助犬は日本においては、まだ実働数は、10頭に満たない状況であり数年前から民間団体による取り組みが始まり5年ほど前からマスメディアで取り上げられ少しずつ介助犬の名前は知られるようになったばかりである。

現在介助犬を利用しているN氏やK氏は、「介助犬の存在」が介助だけでなく、精神面や情緒面で安定を与えてくれていることを実感しているという。

しかし、障害者にとって介助犬を利用することは、多くの不安がある。介助犬の恩恵を障害者本人が受けたいと強く意識し希望しても家族状況・住環境・飼育の維持・介助犬の費用や訓練の展望や可能性などを考慮すると実際に介助犬を利用する方向に至らない場合が多い。

介助動物としての盲導犬は、すでにその有用性が認められ各省庁からの通達（厚生省・環境庁・通産省など）や様々な保護制度のうえで普及している。

介助犬も有用性が社会的に認知され、盲導犬と同様に制度上の施策等の整備が望まれるところである。

したがって、今回、介助犬をまだ利用していない障害者の方々を対象として介助犬に対する期待や不安について実態調査を行ない、有用性のある介助犬への利用を考慮していくうえで何がバリアーになるかを知るために調査を行なったので報告する。

2. 目的

- 1) 期待度・・・介助犬に対する周知度を知り、障害者個々の介助犬への期待を知る。
- 2) 不安度・・・もし介助犬を利用する場合どのような不安や問題点があるかを知る。

3. 調査期間

平成10年12月14日～12月25日

4. 調査方法

介助犬の周知の有無にかかわらず介助犬のビデオを事前にみてもらい、介助犬の役割のイメージを具体的に示した。その直後に研究班員が聞き取り調査を行なった。

5. 調査対象

今回の調査対象者7名（女性6名，男性1名）は、これまで介助犬を利用した経験がなく、上肢及び下肢になんらかの障害をもち日常生活動作と生活関連動作などに何らかの介助を必要としている在宅で生活している障害者の方である。疾患名および年齢や障害期間などについては、（資料1）に示すとおりである。

6. 調査内容

資料2に示すとおり、介助犬に関する知識、保護・育成、制度の必要性、利用する上での不安、緊急時の有用性、本人の現在のADLなどである。

7. 結果・考察について（資料1）

介助犬の周知度は、7名の対象者のうち2名を除いては、TVを通して知っていた。

しかし、介助犬と名前は知っていても、よく訓練されている介助犬が、障害の異なる障害者の個々のニーズにあわせた介助を行なうことが可能であることや、介助犬の育成方法や法的な整備がされていないこと等については、全員が知らなかった。

（1）介助犬に対する主な期待については、以下の3項目についてまとめられる。

- ① 緊急事態に対処する支援への期待
- ② 日常生活動作などへの介助の期待
- ③ 精神的支援への期待

である。

①の緊急事態に対処する支援への期待は、

- a. 移乗時のトラブルへの救援（車椅子などへの移動や車への移動）
- b. 転倒への支援
- c. 電話、来客の応対

など家族の不在中に突発的に起こる事態の対処である。

②の日常生活動作などへの介助の期待は、

- a. 下に落ちた物を取る。
- b. 何か物を持ってくる。

などで、介助犬への期待は障害者の上肢機能の一部となり、障害者の日常生活の介助支援力としての期待がある。

ところで、上肢機能障害がない場合には、介助犬の必要性がないのであろうか。

先天性股関節脱臼で両松葉杖の方は、杖を使うことで、両手がふさがってしまう。

そして、何か至近距離の物を取る場合にも、バランスをとっての作業となる。もし介助犬がいれば至近距離のものも含め広い範囲の物を持ってこることで、生活作業領域が広がってくる。

このような理由から介助犬の必要性を感じている。

また、脊椎カリエスと低酸素症で在宅酸素療法を行なっている方の場合は、全く両下肢が麻痺しているため、車椅子の生活である。この方は、車の運転をして毎日のように一人で外出をしている。なんでも一人やっているのだが、実際の日常生活について質問すると、下にあるものを拾う動作は、体を屈曲し腹部を圧迫させることから呼吸が苦しく、つらいうえに時間がかかっている。もし介助犬がいれば、身体的負担の軽減ができるので、介助犬の必要性を感じている。

このように、たとえ両上肢が自由であっても、介助犬が期待どおりに働けば日常生活のうえで有用であると言える。

③ の精神的支援への期待は、

a. いつもそばにいてくれて、何かあったら役立つことや、身体的障害からくる日常生活の困難への介助をしてくれるという安堵感や安心面の期待

b. 愛玩動物として介助犬を飼うことで、精神的、あるいは情緒的な安定を得たいという期待である。

15年前に頸椎損傷となった方は、「いままで自分で何もかも自由にやっていたことが急に手足が不自由となった。本当に人に物を頼むこと、ましてや外出先の場合には、いまでもかなり勇気が必要である」と答えている。

中途障害者にとっては、人に介助を依頼するということは、いままで自分で出来ていたささいなことも人に頼らなければ出来ないということを思いしらされる。そのため人への依頼は精神的に勇気を必要とする。できるなら自尊心や自立心を損なわれることなく介助をしてもらえることが、最大の希望であろう。

人に物を依頼する場合は、健常者であっても、障害者であっても通常は、あれこれ考えたり躊躇したりするものである。

特に、障害者は、自分一人では時間が相当かかって疲れてしまうことや、全介助をしてもらわなければならない場合がたびたびある。したがって、そのたびに自分以外（物や人やお金）に頼らざるを得ない。そんなとき、一日中生活を共にし、気兼ねなく介助をしてくれる存在は、大きいであろう。

介助には、食事、入浴、衣服着脱、排泄、入浴、起き上がり、歩行、などの日常生活動作や、買い物やコミュニケーションなどの生活関連動作などがあるが、介助犬は、これらのすべての介助で、万能であるというわけではない。しかし、よく訓練された介助犬は、障害の異なる障害者の個々のニーズにあわせた介助が可能であり、有用性についての期待

が大きいといえる。

「障害とは、実生活の中で1つあるいは、複数の動作活動を制限しているすべての身体的、精神的、情緒的な障害のことをいう。」と「すばらしき伴侶、介助犬」(制作日本介助犬アカデミー)のなかで高柳広子氏が述べている。

機能的な障害が、生活に及ぼす影響は、精神的にも情緒的にも現れてくる。

このような側面からも、介助犬の存在が担う役割は、非常に大きいと考える。

(2) 介助犬に対する不安度については、調査対象のほぼ全員が介助犬を欲しいと答え、介助犬に対する興味は持っているが、全員が介助犬を利用することに躊躇していた。

それは、介助犬に対する期待と必要性を障害者自身は、感じているが、いざ介助犬を利用すると、家族(介助者)やヘルパーなどへの新たな介護負担(犬の散歩や世話)をもたらすことの「気兼ね」が躊躇の主因を成している。すなわち、障害者をとりまく生活環境のなかでの家族(介助者)や障害者の意識の違いが大きく関係している。

また、介助犬にかかる費用(購入費、食事代、予防接種など)についても気にしている。

障害者の雇用促進と雇用の安定については、国は「障害者の雇用の促進などに関する法律」にもとづいて、種々の政策を実施しているものの、介助が必要な状況での就労は、体力的にも限界がある。今回、回答された7名のなかで頸椎損傷者の方のみが会社勤めをして安定した収入を得ている。他の6名は、障害者年金生活者である。したがって、介助犬にかかる費用は、新たな経済的負担となるから、本人にとっても家族にとっても大きな問題である。購入金額や飼育費用の目安など金額の明示もさることながら補助金制度の確立が必要であろう。

このように新たに介助犬を利用することの障害者本人の不安は、

①家族や介護者の理解や協力の必要性

②介助犬飼育負担

であることがわかった。

介護を要する対象者の多くは、身体障害や疾病に加えて精神的、情緒的問題や家庭的、地域的な援助問題を抱えている場合が多くある。

また、経済的、就労的問題も抱えるなど多面的な社会問題、生活問題を抱えていることが多いが今回調査した対象者もほとんど例外ではなかった。

そのような状況のなかで介助犬を利用するにあたっての不安は、至極当然な不安である。

したがって、このような障害者の生活状況を相対的に理解し、生活の質を向上させていくための条件整備が必要と思われる。

今回は7名で調査件数も少なかったことから統計的処理ができなかった。したがって、①今後はさらに調査件数を増やしていきたいと考えている。また、②7名とも疾患がまちまちであったので今後は、疾患別障害別調査の必要性がある。さらに、③介助犬を利用している方の不安の解消方法などについて調査すべきであろう。

引用文献

¹⁾ 高柳友子, スーザン・ダンカン来日招待講演すばらしき伴侶、介助犬1997
日本介助アカデミー, p 3

²⁾ Allen, K. & Blascovich. J. (1996). The value of service dog for people with
severe ambulatory disabilities. Journal of American Medical Association, 275 (13),
P1001-1006.